

Title	慶應義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』解題・翻刻
Sub Title	慶應義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』解題・翻刻
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1995
Jtitle	三田國文 No.23 (1995. 12) ,p.38- 46
JaLC DOI	10.14991/002.19951200-0038
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19951200-0038">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19951200-0038</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 慶応義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』解題・翻刻

石川 透

## 解題

ここに紹介する慶応義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』は、「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(「御伽草子の世界」)の「十二類絵巻」の項に、(一)の(三)系統として著録されている伝本である。しかし、本文を精査すると、(一)の(ロ)系統の「寛文」喜右衛門刊絵入大本二巻(内題「猷太平記」)に近いことがわかる。しかも、小異の箇所を検討すると、「猷太平記」を元に、奈良絵本に仕立て直したのではないかと思われる。寛文年間から元禄年間にかけて製作された、奈良絵本・絵巻には、当時の刊本を元にしたと思われる伝本が散見する。室町物語を研究する上では、奈良絵本製作における、元本の依拠の仕方や改変の仕方、さらには挿絵の作り方等を考える必要がある。本伝本は、挿絵が抜き取られているが、「十二類絵巻」の本文研究には益するであろう。ついでにいうならば、これと同じ(一)の(三)系統に著録される慶応義塾図書館蔵榊形一帖(歌合の条のみ)は、本文的には、(一)の(イ)系統の有名な堂本家蔵絵巻の本文に近く、形態的に同類(歌合の条のみ)

の群書類従本とは別系統である。なお、目録類に著録されていないが、「十二類絵巻」「猷太平記」の参考文献には、青山忠一「猷太平記」の研究(『近世文学論攷 研究と資料』一九八五年)がある。

本書の書誌は、以下の通りである。

所蔵、慶応義塾図書館(二二〇―一九八一)

形態、元奈良絵本、合一帖(元上下二帖)

時代、「江戸前期」写

寸法、縦二二・九糎、横一六・七糎

表紙、紺地草花模様

外題、左上後補題簽「十二類歌合之草子」(本文別筆)

内題、ナシ

料紙、下絵入り斐紙

行数、半葉一〇行

字高、約一八糎

丁数、三三丁(元上一八丁、下一四丁)、内二丁欠

挿絵、上六頁、下七頁、以上全て欠

奥書、ナシ

印記、見返し朱印「アカキ」

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。なお、下冊部分には綴じ違えによる乱丁があるが、翻刻では、それを正した。また、やはり下冊部分にある二丁の欠丁は、「獸太平記」〔室町時代物語大成〕四で補い、（）括弧に入れて掲出した。

最後に、本書の翻刻掲載の許可を賜った慶応義塾図書館に厚く御礼申し上げたい。

## 十二類歌合之草子

〔上〕

それ、諸仏ほさつのほんせい、まちくなりといへとも、さうほうてんしのりやく、ことにすくれますは、やくしよらいのひくほんなるへし。しゆひやうしつしよ、しんくあんらくと、ちかひ給ふにより、そくせうむしやう、正とうほたいのせつにいたるまで、十二大くはん、しかしながら、けんせ、たう生をかねて、衆生をさいとし、十二神しやう、ちうや、しこくをりやうして、我らを、おうこし給ふ事、かたしけなしと、申もをろか也。

こゝに、いつれの世にかありけん、ころは、三五のりやうしんに、十二神しやうのししや共、あつまりこそりて、あそひたはふれつゝ、「此くにの、ふうそくなれば、いさや、歌よみ侍

らん」とて、ちうやを左右にわかちて、歌合のため、月をたいにて、えいし侍ける所へ、しか一かしら、たぬきをともめしくして、きたりつゝ、「御歌合の御くわいと聞ゆ。ちやうもんのために、すいさんせり。かつは、判者なくてはむねん也。かたのことく、鹿仙の一分にて侍れば、はんしやし申へし」と申ければ、をのくみき、ことのほかなることちして、「とやせまし、かくやせん」と、あひきするところに、夜一はんのいぬ、はしりいて、とかめけるは、「われらは、やくしのけんそくとして、十二ときをかたとれり。御へんたち、いなひ野よりのともから、此席にのそむへきにあらず。たしかに、かへり給へ」と、あらゝかにのしりて、すくに、とひかゝらんとしけるに、鹿もあふなくみえけるを、ひるの第一はんのたつ、なためて、判者をゆるしつゝ、「つまこひの御なくさみにし給へ」と申ければ、鹿、よろこひて、座につきとひぬ。

判者 鹿

〔挿絵・第一図・欠〕

一番 左 辰

あまつ空うきたつ雲もこゝろして月をはさらぬよとのむら雨

右 戌

里のいぬ月みる秋の夜半たにもほしまほとや人の思はん

判に云、左の歌、月のため、うき雨を心にまかせ侍らん。

あらまほしくや。

右歌、星まほるかとおやまたれんこと、むねんに聞ゆ。さ

れば、左勝と申へし。

二番 左 巳

月みれはうさもわする、秋の夜をかなしみおもふひとや成らん  
右 亥

くさまくらふすゐの床の山かせに雲もさはらぬ月をみるかな  
判に云、左の歌、月を見て、うさをわすれ、秋の夜をなかしと思ひて、あかし侍らん。いとやさし。

右の歌、とこの山風に、雲もさはらぬ月をみん心もわりなし。されは、何れも分かたたく聞ゆ。持とや申へき。

三番 左 午

あふさかや関のこなたにまちいて、よはにすみぬるもち月の駒  
右 子

夜もすから秋のみそらをなかわれは月のねすみと身は成ぬへし  
判に云、もち月の駒、月のねすみ、ともにゆへありて、せうふわきかたし。これも持とや申へき。

四番 左 未

めぐりきて月みる秋に又なりぬこれやひつしのあゆみ成らん  
右 丑

むら雲のそらさたまらぬ月を見てよはのしくれをうしとこそ思へ  
判にいはいはく、左の歌、月みる秋をむかへては、まつ、これをもてなすへきに、ひつしのあゆみ、世にいとはしく聞ゆる心ちしておほゆ。

右の歌、月を見て、夜半の時雨をかなしむ心、まことにやさし。われもぬれて、ひとり鳴てこそ侍しか。右をかちとや申へからん。

五番 左 申

月をのみさやまおろしはしくるとも空くもらさる秋の夜もかな  
右 寅

みるまゝになみた露ちる月にしもとらふす野への秋かせのこゑ  
判に云、左の歌、山かせはしくるとも、月なくもりそと、かなしみ給、おもひやられて聞ゆ。

右歌、とらふす野へのと侍れは、月をみてもふしけん心、いかゝとおほゆる。されは、左をかちと申へし。

六番 左 酉

つれなしとゆふつけとりもなくたひにかけほのめかすあり明の  
月 卯

あけかたの月のひかりのしろうさきみゝにもたかき松風のことゑ  
判に云、左の歌、つれなく待わひて、かけほのめく在明の月、めつらしく覚ゆ。

右歌、松かせみゝにたかき、きゝにくゝや。されは、左をかちと申へき。

和歌の会、はてぬれば、「をのく、判者をもてなすへし」とて、めんくゝに、めつらしきさかな、一しゆつゝもとめて、さかもりし、らんふ、えんねんにをよひけり。鹿は、しきたいして、なこりおしみながら、「山ちはるかに侍れは」とて、たちかへりぬ。

〔挿絵・第二回・欠〕

そのうち、兩三日をへて、ありし名こりのわすれかたさに、をのく、又、くわいかうして、もみちの山のふもとを、くわい所にかまへ、かさねて、判者をしやうしければ、鹿、思ひけ

るは、「かやうの所へ、二たひのそむ事、古人のいましめなれは」と、しんしやくして、心はすゝめとも、「このたひは、まゐりたく候に、おりふし、かせのき」と申て、つかひをかへしければ、まへにともしたりしたぬき、しかのもてなされしを、あなかに、うらやましく思ひて、「われも、なとか判者にならざらん」とて、心はかりは出たちて、すいさんしたりければ、鹿をこそをそしと、おもひつるところに、かゝる下らう、いてい、ふしきなるすかたにて、やかて、よこ座に、はゝかるところなく、ゐなをりて、しゆくゝのくわこんとも、申ければ、十二るい、大きにいきりて、いきりて、せひなくおひ出し、さんゝのちしよくにをよひけり。狸は、とかくして、命はかりいきて、からきめみてかへりぬ。鹿まつ所のためきは、これより申とかや。

〔挿絵・第三図・欠〕

たぬき、からきいのち、いきて、つかにかくれて、いきつきゐたりけるか、此こゝろうさを思ふに、いかにもしてはちすゝかて、さて、あるへきにあらすと思ひて、よろつのきんしうをかたらひつゝ、一すち、いくさのかまへをそ、いとなみける。みやこには、つはもの、せうゝ待れとも、京上も、みちゆかす、たゝ、けのふてをそめ、はなのにかみに文をかきて、しのひゝゝにこそかたらひけれ。まつ、一もんのかはをそのかみ、いなり山のふるきつね、くまの山のわかくま、れんたい野のおほかみ、あたこの山のふるとひ、ゆるきのもりのしらさき、二日市はのむらからず、あくをこのむふくろふなとゝ、同心しける。さふらひ大将には、ねこ、てん、いたち、ねすみはむ鳥、

みゝつくなども候ひけり。そのせいは、三百よき、つかのしやうにたてこもり、をのゝ、きせい、ひやうちやう、とりゝなり。その中に、はやりのおほかみ、すゝみ出で申けるは、「かやうの事、かつにのるにはしかす。この月の、むなしくくれぬこそ、ほいなけれ。さりながら、九月一日は、しやくにちなれば、二日のいぬのをはりほとに、をしよせて、夜うちにせん」と申ければ、みなゝ、このきにそとうしける。

〔挿絵・第四図・欠〕

さるほとに、こくないつうけのことなれば、十二るい、このよしをつたへきゝて、「やすからぬ事也。たぬきほとんやつはらを、かたきにうけて、よせられたらんは、いひかひなし。いさや、さかよせよ。こなたよりをしよせん」ときして、「時をうつつへからず」とて、やかて、出立、をのゝ、わかほうはい、そのほか、ひんきのもの共、おほくあひかたらひて、同八月三十日、うちあかしに、五百よきのせいにて、かれらか、こもりゐたるところの、さかひのしやうへそ、をしよせける。たぬき、思ひのほかの心ちして、あはてさはきけれども、かたらふところのともから、さすかに、はちあるつはものなれば、すこしもさはかす、さかも木引、やたはねときて、よせてのすゝむをそ、待かけたる。

まつ一はんに、庭鳥、時をつくりければ、しろにも、ときをあはせける。矢合せしてのち、両方の矢のしけき事、雨のことし。いくさよはひは、雷ににたり。矢をひゝかし、ちをうこかす。時をうつせとも、せうふは、さらゝみえさりけり。よせてのかたより、ねすみ、いむけの袖の、かふりのいたをくはへ、

しころをかたふけて、はしり出たりければ、しろのうちより、ねこ、出あひて、おつかけるを、いぬ、へたゝりて、ねこを、しろへそ、おひ入ける。そのとき、おほかみ、もとより、はやりおのむしやなれば、いぬとくまんと、はせいづるを、よせてのら、おちあひて、おほかみはうちとりぬ。しろの内には、むねと、たのみ思ひけるおほかみ、うたれぬれば、心ほそくそおほえける。やくそくのきつねは、もとより、はけくしき心にて、「こんく」とは、ちきりながら、その日はみえず。一方に、たのみつるとひは、てんくしきものにて、かへりちうしてとひうせぬ。よせては、かつにのつて、せめければ、うたるゝもの、かすをしらす。一ちん、やふれぬれば、さんたう、まつたき事なくして、をのく、みな、ちりく、にそ、おちうせにける。

〔挿絵・第五図・欠〕

十二るいのともからは、たゝかひに、うちかつといへとも、けうとの長ほんたるたぬきを、おひにかしてければ、すこふるいこんをなして、日、すてに、くれにをよひければ、こよひは、のしゆくをとりて、いきをやすめ、明たん、うちあかしに、かさねて、きんへんのつかあなのうろを、さかしもとむへきよし、ひやうちやうす。

たぬきは、くわいけいのはちを、きよむるまでこそなからめ、いくさにまけて、めんほくをうしなひければ、すかたをやつし、せんちやうをのかれて、つめのしやうとたのむ所の、木のうつろに、はひいりて、いきつきみたりけるか、いかにもして、今一と、はちあるせうふをして、うちしにをせばやと、思ひけれ

共、かたらふつはものゝ中に、むねとたのむ所のおほかみ、うたれて、よせいも、みな、ちりく、におちうせぬれば、たのむかたなき身ひとつに、いかにすへしともおほへさりけり。

あたこの太郎のこうけん、ふるとひは、しはらく、せんちやうに、かけりまひけれ共、いくさ、たのみなくみえければ、ひよろううたひて、いたりけるか、ししうのやう、さすか、おほかなくやありけん、しろちかきもりのこすゑに、はをやすめ、とをめつかひてゐたりけるに、たぬき、いくさにまけて、はうく、もりの下なる木のうつろに、ゐたるを見て、いそぎ、とひわたりて、「さても、いかに」と、たつぬれば、ことのやう、かたりて、「今は、かくて、いのちいきてかひなし。此うへの事、いかゝすへき」と、申あひけり。

〔挿絵・第六図・欠〕

ふるとひかいふやう、「かせんはにて、申つるやうに、十二るいのともからは、むかしより、さすかに、しかんもつの名をえたることゝは、誰かしらぬに、さるへきようかいなとも、かまへられす。いぬはかりを、ひとり、かたきにせられし時たにも、よはきをみて、にけこもるをこそ、せんとゝせられし。つかのしろをたのみて、大しのかたきともを、こゝにしてまたれる事、たなりよのいたす所也。ふんないひろき所こそ、かたきのよはめを見ては、かけ出ておつちらし、かたきてこはき時は、引いりて、いきをやすめなとして、しゝう、りをうる事なるに、ふんないせはきつかあなに、かけ引のしんたいも、心にまかせぬゆへに、おほくのゆうしを、うちしにさする事は、しかしながら、うんめいの、しからしむるゆへかとおほゆれば、

きやうかうとても、さふらひすくなく侍れとも、かくて、きて、やみなん。御へん、一人のいこんにあらず。同心すはいのちしよくなり。それにつきて、いさゝか、みかたのかううんとおほゆる事は、十二るいのともから、明たん、かさねて、御へんのさいしよを、たつねもとめんとて、こよひ、のしゆくをとりて侍る也。さためて、いくさにかちほこりて、大しゆのみて、えいふしたるらんとおほゆ。こんはん、かののしゆくを、夜うちにせんに、なとか、むねとのつはもの、少うたさらん。くつきやうのやつはら、一兩人も、うち取なは、そのち、太郎坊にあんない申て、あたこのみねに、うちあかりて、くつれさかをほりきりて、たてこもりなは、十二るいの人くも、いかてか、たやすくおとすへき。かつせんのならひ、一人、きをそんすといへとも、よせい、こゝろ、まちくなれば、そうにひかれて、たいさんする事、ちからなきしたいなり。わか身をもて、をしはかるに、残りの人くも、ひたすらに、こゝろさしをへんするには、よもあらし。御へんのあんひ、きゝためんと、きんへんに、うかかふたくひも侍らん。このへんうちめくりて、もよほしあつむへし。夜うちの人しゆ、おほくては、なかくとうしうちして、あしき事なり。くつきやうのものとも、ようしんたにあらは、はちあるかたき、なとか、うつとらさらん。夜ふけぬさきに、いそきもよほすへし」とて、やかて、とひさりぬ。

〔下〕

さるほとに、ふるとひ、さんしのほとに、とひめくりて、しかるへきところに、ふれまはしければ、あんのことく、「この

き、もつともく、しかるへし」とて、あひともなふともから、あまた、いてきたる。まみのこんのかみは、たはらのおくにかへるとて、こはた山を、かちよりこえてけるに、おひつきて、かくと申ければ、すなはち、あひともなふ。いなり山のふるきつねは、かへりさかより、たちかへる。くまの山のわかくまは、ほんさんは、みちもはるかなればとて、しはらく、今くまのへんにやすらひけるも、この事きひて、とうしんす。おほかみかちやくし、のいぬの太郎、ちゝかかはねをとりて、けうやうせんとて、いとなみけるか、れんたいのは、ほともとをし。さんまいは、いつもおなじことなればとて、えんねんしへ、をくらんとしける所へ、つけければ、おやのかたきに、二たひあはん事をよるこひて、さうれいをさしをきて、三所へそうち出ける。そのほか、二もとのすきより、おひそたちて、いかなるものをも、てつかみにせんとおもひたる、わし太郎も、此たひ、はしめてあひともなふ。しなのくくの住人、さらしな山のたか太郎は、きんやのはんをつとめんとて、折ふし、在京したるに、ふるとひか、やしなひみなりければ、「かゝる事こそ候へ。見つき給へかし」と申ければ、もとより、はやりのわかむしやなれば、せひなく、うち出て、まつさきかけてそ、すゝみける。そのほかのゆふし、かれこれ、三十よかしら、あひともなひて、しよやのかねよりさきに、もりのへんにあつまりて、木のうつろより、たぬき出たるに、此よし申ければ、よろこふこと、かきりなし。よせい少々まちくして、やはんはかりに、かの野宿にそ、をしよせたる。十二るいのともからは、ひねもすのいくさにくたひれて、をのく、ものくくつろけて、きうそくす。

上こは、しよくし過て、まつ、さけをのみて、えひふしたり。夜うちのしたく、思ひもよらざりけるに、四方より、手をわかち、三方にゆみやをとりにて、よき兵をすゝませ、一方よりは、うつてをそるへ、きつさきをとゝのへて、きつて入。思ひよらぬ事なれば、とるものもとりあへずして、よきもの、あまた、きすをかうふりて、四方へ、たいさんしたりけり。

〔挿絵・第一図・欠〕

〔挿絵・第二図・欠〕

たぬきは、夜うちにかちて、いさゝか、はちをすゝきたるおもひをなして、ふるとひにつきて、あたこの太郎坊の、ようかいをこひうければ、「こんほんの、ゆいしよはしらねともなんち、ふちをくはゆるうへは、ようかい、いつくにても、心にまかすへし。しやうくはくを、たう山に、かまへざるにおゐては、かたきにうちおとされぬへし。たゝかひの時は、かねて申へし。せいをもよほし、かうりよくすへき也」とぞ、おほせられる。十二るいのかたには、野しゆくの夜うちに、しかるへきとも、ともから、あまた、きすをかうふりぬれば、やすからぬことにおもひて、かさねて、せいをもよほして、あたこのしやうへ、よすへきよし、きしけるか、「せんとは、かたきも、こせいなり。しろも、ひらちなりしかはこそ、ひるのいくさにかちたりしか、此たひは、しやうも、くはうはくなり。太郎坊、よりきすなれば、さためて、まうせいなるへし。さうなく、よせてもいかゝ」など、はつさのひつし、申ければ、そのの上しゆ、たつたゆふ、すゝみ出、申けるは、「たとへ、あたこの太郎坊、よりきと申共、我らかるせいに、いかてかまさるへき。これ

ほとんせうしをは、八大りうわうに、申までもあるまし。下かいのせうりうはかりを、もよほして、あひむかはんするに、何ものか、たてあふへき。このたひにおゐては、それかしをは、からめてにむけ給へ。たんはちより、からめてへまはり、あたこのみねに、立のほり、しやうくはくを、けやふりて、すて侍らん」と、申ければ、「もつとも、しかるへし」とて、のこるところのつはもの、目をてんして、大てのかたよりせめのほる。

〔挿絵・第三図・欠〕

〔挿絵・第四図・欠〕

(しやうのかたには、これを聞て、くづれざか、ほりふさぎ、かいだてかきて、まちかたり。そのかまへ、けんごにして、たやすく、おつべきやうもなかりければ、さうたんより、くれに至るまで、ごかくのいくさにて、せうぶはみえざりけり。やうく、とりのこくにをよびて、とらや、からめてにまはりぬとおぼえて、じやうちう、さはぎあへり。あられに、いくささせ、いかづち、なりまはりて、ほどなく、つめのじやうくわく、けやぶりければ、たのむ所の、太郎ぼうが) たうるいも、いかてか、こらふへき。みな、かしこ、この、木の下、いはのはさまに、にけかくれければ、まして、そのほかのともからは、一やをいるにをよはず、しはすたにへむかつて、おちうせぬ。

〔挿絵・第五図・欠〕

ちやうほん人のたぬきは、もとのすかたにては、うちとゝめられぬへく、おほえければ、ほつたいのすかたにはけて、月のわのみたうの、仏たんのしたへそ、にけ入ける。たぬき、いくさに打まけて、二とのちしよくを、せんかたなくこそ思ひけれ。



いかにもして、此はちをすゝかんと、あんしけるか、もとのすかたにては、なをも、かなひかたくおほえて、おにのかたちになりて、かれらを、たふらかし、心まよひせんとき、十二るいるいを、みな、くひてんとおもひて、くろつかにこもりゐて、思ひのまゝに、おにゝになりぬ。しおふせたるこゝちして、十二るい、しゆ糸のところ、おもむきける。みちにて、いぬにかめられて、すてに、あふなく見えければ、からくして、にけにけり。心うき、申はかりなし。いぬにたに、みしられぬ。まして、たつ、とらなとは、さこそ、すさまじからんすらめと、思ひやられて、此くはたても、むなしくとゝまりぬ。

〔挿絵・第六回・欠〕

（とにかくに、おもしろくもなきことのみ、かきなれば、人めもはづかしくおほえて、ふかく、あなのそこにかくれゐて、身のありさまを、あんずるに、ゆめまほろしのよの中に、よしなき、がしう、けうまんにほだされて、又、ないりのくはきやうに、かへらん事こそ、むやくなれ。むじやう、てんべんのよは、いかにしてもありなん。「むかしのつかの、かぞそひて」とよみける、さいぎやうが歌、思ひしられて、こゝろをとゞむる、あなのすみかとても、ほんらい、三がいくわたく）の中そかし。しこく、たうらいして、ふすへられんときは、はく大きくうのくるまも、かたきのかたにあるへければ、たれかは、もんせんのまうけも、し侍るへき。しかし、へんけしよしうのまよひを、ひるかへして、えんしやう、しつしやうのさとりを、ひらかんにはと、おもひとりて、としころ、すみなれし、つかあな、しよりやうとたのみし、えんりんも、みな、さいしとも

ゆつりて、心つよく、ほんなふの家をいて、ほたいのみちに入ければ、さいしけんそくも、なこりおしみて、なくくわかれにけり。いとあはれになん。

さて、しゆくもんに、いりなは、いつれのふつけうを、かくしてか、さとりをひらくへきとあんしけり。しんこんのをしへは、しよしうの、さいちやうなれば、このほうをまなひて、三みつのきやうをしゆし、五さうのくほんにちうして、そくしんしやうふつなり。又、ほつけは、せそんしゆつけの、ほんくわい、しゆしやうしやうふつの、ちきたうなれば、此しうにいつて、一念三千の、くわんをこらして、六こんしやうくくくらゐにや、かなはまし。又、ほつさうしうを、うかゝひて、しむみつきやう、ゆかきやうとうに、まなこをさらし、五ちうゆいしきの、はなをもてあそひ、百ほうみやうもんの、月をみかまし。又、とすうのきやうをして、さわうこんけん、ゆしゆつの大みね、こんかうとうし、おうけんの、かつらきなど、しゆきやうし、一たらにの、きやうしやとなりて、ちしやのかうへをや、ふまゝしなど、しゆくにあんしけるか、いかにもしりきのきやうは、しゆしかたく、おほえて、たうこん、まつほうせ、五ちよく、あくせ、ゆいしやうと、一もんかつう、にうろのをしへこそ、かいふんさうおうの、ほうもんなるへけれど、おもひさためて、ほうねん上人のもんりうに、たつねあひて、しゆつけをとけて、なを、れんせうほうとそ申ける。つゐに、さいけにてはしらすりし、京のほりのほんいをとけ、まみあみた仏たうしやうとかうして、よなくこゝろをすまして、はらつゝみを、ひやうしにうちて、おとり念仏をそ申ける。

〔挿絵・第七回・欠〕

人さとちかき住あも、なを、ほんいならず、おほえければ、にし山のおくに、さうあんを結ひて、みねの花をたをり、たにのみつをくみて、こせほたいのつとめ、たねんなき中にも、むかしのよしう、なを、すてかたくや寛えけん、月のゆふへ、雪のあした、心をふうそくにそめ、くちにわかを詠して、あかしくらしけり。かのしやもんいゑさとか、うきよをのかれて、てんたいさんに、あそひしとき、五すいをしよきやくし、四まをかうふくせしにも、なを、そのかうせさるは、たゝしきのみなりとこそ、みなもとのしたかふは、かきとゝめ侍しか。わかん、ことなれとも、よしうに、おなし心にこそと、いと、やさしくも侍るかな。